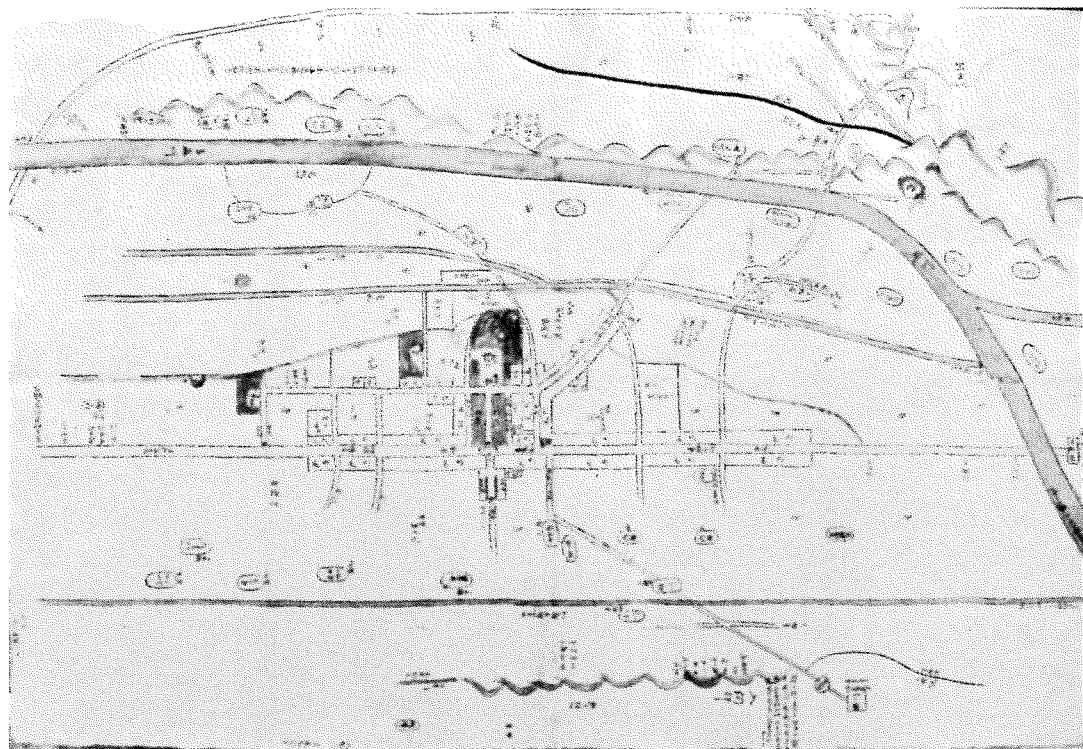


あるむぜお

府中市郷土の森だより

No.10

al museo



府中領絵図

紙本着色 江戸時代後期

江戸近郊の“領”については、鷹場などととも
に江戸時代の支配の実態という面から近年研究
が進んでいます。府中領と呼ばれている範囲は
「新編武蔵風土記稿」によれば、府中宿を中心
にほぼ現在の国立、国分寺、小金井、府中、調
布、稲城の各市域にまたがる45の村々です。

上の絵図は便宜上この名称と呼ばれていま
すが、府中領をテーマにして描かれたというより
は、府中の中心部とかなり広域な地理概念図と
いうべきでしょう。記載の内容もさることなが
ら、明るい色調と几帳面な筆致は絵本を見るよ
うな楽しさも誘います。

旧府中郵便取扱所(旧矢島家住宅)

郷土の森復原建築物のひとつ、旧府中郵便取扱所をご紹介します。

明治4年(1871)1月に郵便規則が制定され、同年3月郵便切手が採用されて、日本の近代郵便制度はスタートしました。これにもとづき、明治5年3月には、府中番場宿の名主兼問屋であった矢島九兵衛が郵便取扱役に任命され、その居宅が郵便取扱所にあてられました。この年多摩地区では、府中のほか布田(調布市)、日野、原町田(町田市)、五日市、青梅、田無の6カ所で郵便取扱所が開業しています。この府中郵便取扱所は、明治7年に府中郵便役所、明治8年には府中郵便局と改称され、明治13年には為替や貯金の業務も行っていたようです。矢島家では明治22年まで郵便取扱を行いました。その後府中町神戸の中島家が取扱うようになったと考えられます。

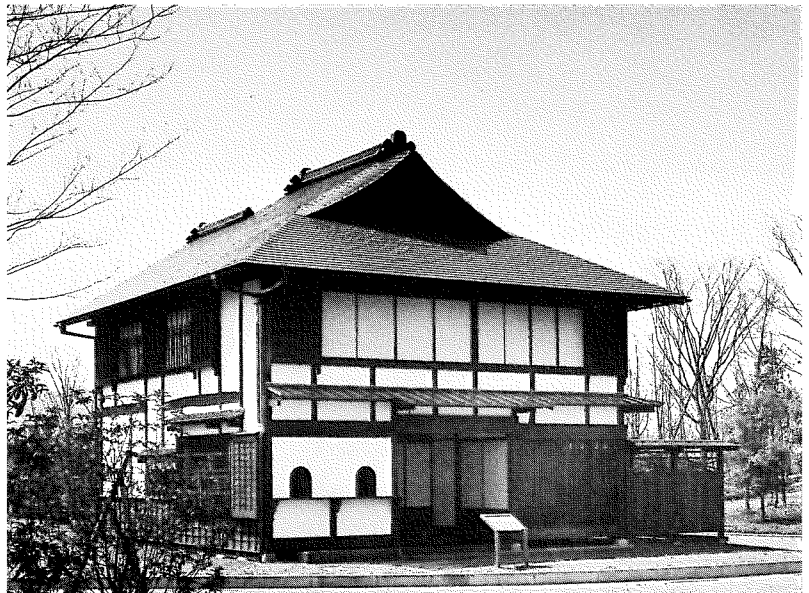
さて旧矢島家住宅の郵便取扱所としての面影は、正面向かって左側にみられます。つまり2つの円弧型窓口と、その前に設けられたカウンターです。矢島家住宅が郵便取扱所にあてられたわけですから、これらの若干の改造が急ぎよ行われ、郷土の森に復原された姿で開設したものと考えられます。部屋の中に入ってみますと、郵便窓口の内側には上戸の痕跡が認められます。つまり上戸であったところを改造して、郵便窓口を設けたのです。上戸とは街道沿いの商家や旅籠で使われる建具で、戸袋が梁上に設けられていて、日中の商い時には板戸を上戸の戸袋にしまい込み、方立柱と呼ばれる取りはずしのできる柱も取りはず

し、広い間口を確保できる合理的な建具です。

間口が狭く、奥行のある屋敷割をもつ街道に沿った民家では、この上戸が一般的にみられます。この旧矢島家住宅や、同じく郷土の森に復原されている旧島田家住宅(店蔵)、旧田中家住宅にもこの上戸がみられ、街道沿いの民家建具形式を理解する、恰好の材料となっています。

民家を外観からながめることだけではなく、今度は民家内部から観察してみると、ますます興味はつきないのではないのでしょうか。(G)

旧所在地	府中市宮西町4-11
解体	昭和60年12月～昭和61年3月
復原	昭和63年8月～平成元年3月
構造	木造2階建銅板屋根
延面積	126.42㎡
設計・監理	早稲田大学建築史研究室 (代表)渡辺保忠
施工	櫛大門組



旧府中郵便取扱所 ～1枚の写真から～

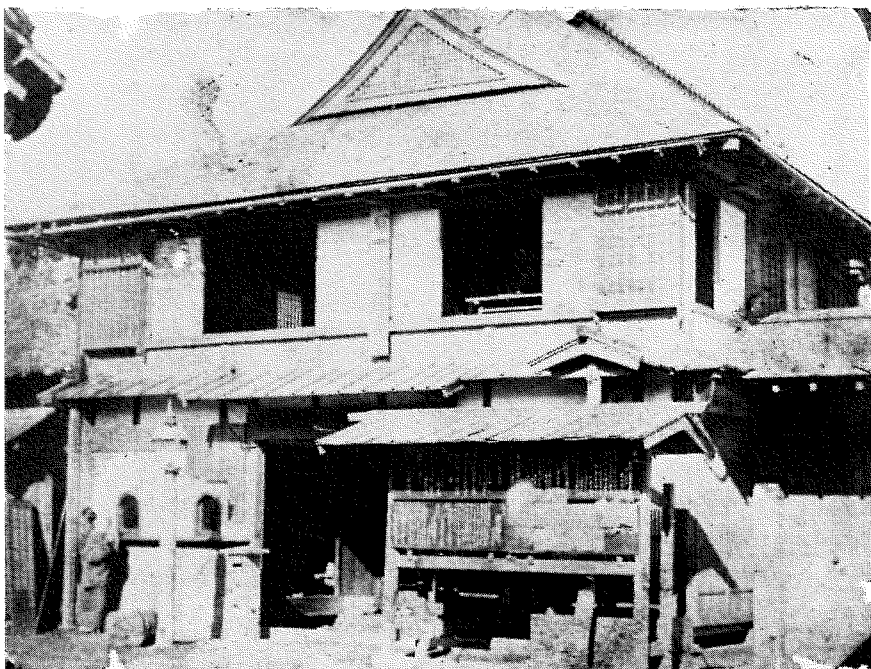
後藤 廣史

郷土の森内には7棟の移築復原建築物がありますが、痕跡等の建築学的調査のほか、地図や写真といった資料を参考にしながら、各々往時の姿に復原したものです。そのひとつ旧矢島家住宅を、郷土の森では明治初期の旧府中郵便取扱所として復原しましたが、同復原にあたり大変参考になった1枚の写真を紹介し、判明する事実を綴ってみることにします。

同写真は矢島家所蔵のもので、裏には「甲州街道府中驛郵便局 矢嶋九兵衛 明治十二年第十二月写之」とあり、明治5年矢島家が郵便取扱所にあてられた7年後のもので、明治初期の、しかも写真が一般に普及していなかった頃の郵便取扱所の写真が現存することは、日本郵政史上貴重な資料といえるでしょう。

ここで同写真を詳しくみてみます。まず円弧型郵便窓口2か所とカウンター、そしてカウンター右下に角柱の郵便箱がみられます。また判読できませんが窓口右上に4枚、2階中央に驛で始まる縦看板がみられますが、いずれも郵便関係のものと考えられます。

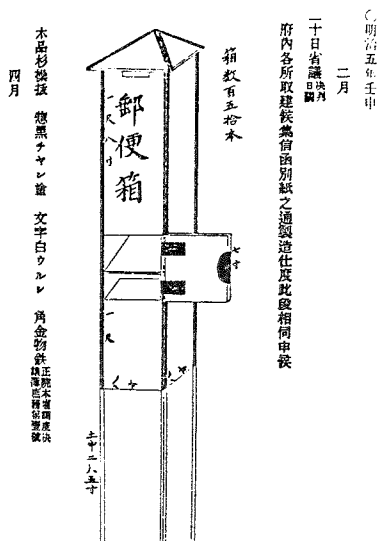
角柱郵便箱は明治5年に登場するもので、『ていめい通明鑑』にその仕様が記載され、同記載によれば幅8寸(24.2cm)の墨ぬり杉材を用い角柱とし、かどは鉄板で縁取されます。投函口下には「郵便箱」と白漆で書かれ、その下には取出口が設



府中郵便取扱所(矢島中氏所蔵：明治12年12月)

けられます。そして取出口をあけると、箱内に板様のものが斜めにあつて、その上に郵便物がたまり、なかの郵便物が滑り出てくるような工夫がみられます。矢島家写真の郵便箱は、撮影時期(明治12年)からしても、間違いなく同型のものと考えられます。この角柱郵便箱は、明治20年以降「POST」と記される改良型ができて、とつてかわられました。『むかしの府中』(写真集)をみていくと、同じく郷土の森に復原した田中家住宅前にも角柱郵便箱が確認されますが、撮影年が明治末期とあることから、明治20年以降の改良型の可能性があります。

なお写真にみえる郵便箱は第2号というべきもので、第1号は明治4年3月の郵便創業時に東京、京都、大阪に設置されたものです。この3都以外の人々にとっては、第2号の角柱郵便箱が初めて見るものであり、文明開化というひとつの時代の象徴として人々の目に映ったに違いありません。田舎の紳士がタレベン箱と読ん



角柱郵便箱(『駅通明鑑』より)

で公衆便所と間違えたというエピソードや、火災や水害の折、この郵便箱を抜き取って郵便物の保護に協力した者に手当をだすなど、現代では想像できないような郵便創業史話が残っています。

次に同写真右側の掲示板をみてみますと、数枚の高札がみられ、虫眼鏡をあてて読んでいくといくらか判読できます。掲示板最上段は「番外 神奈川県()村平民 黒田甚兵衛」に始まり、「右之通達如□ 北多摩()」(中央)で終わり、引続き「()貳百八十四號」で始まり、途中で「□ □□平民 高橋□□」、最後は「北多摩郡役所」と判読でき、また下段も「番外」で始まる同様の記載があるようです。これら内容を検討すると、北多摩郡役所が一定の事項を公式に郡民に広く公示する告示行為と考えられ、郡の掲示板であることが判明します。いわば現在の市役所玄関前に設置される掲示板と同性格のもので、以上のように郵便取扱所、北多摩郡役所という国と地方行政が同居しているのが、同写真から伺われるのです。

それではここで、北多摩郡役所について述べてみます。明治11年7月『郡区町村編制法』が定められ、神奈川県多摩郡は西多摩郡、南多摩郡、北多摩郡に分けられることになり、北多摩郡役

所は府中駅におかれることとなります。そして同年12月2日から「北多摩郡番場宿百六番地 矢島九兵衛持家」に、北多摩郡役所が開設されたのです。矢島家写真は明治12年12月のもので、郡役所開設約1年後のもので、同写真2階に見える、机を構え椅子に腰かけて執務中の人物は北多摩郡役所吏員である可能性が高く、またその伝承も耳にします。明治12年12月当時の北多摩郡役所吏員を抽出してみますと、郡長・砂川源五右衛門(砂川村・現立川市)のほか、郡書記として比留間雄亮、比留間政同(以上府中駅・現府中市)、紅林徳五郎(郷地村・現昭島市)、中島次郎兵衛、高橋恭寿、宮川邦種(茨城県)などの名前がみえますが、同写真人物はこれらのいずれかの人物でしょうか。以上から、郵便取扱所であった矢島家住宅が同じく北多摩郡役所であった可能性が高く、その告示行為が同掲示板であったと推測できます。

最後に、同写真にあるガス灯について紹介しておきます。横浜にガス灯が竣工したのは明治5年9月で、東京では同8年のことです。そして府中では矢島家が明治12年、市内片町の高安寺前に同13年、郷土の森に復原した島田家に同20年と記録があります。いずれにせよ府中では、明治10年代前半から甲州街道に沿ってガス灯がみられるようになるようです。しかしガス灯は郵便取扱所や北多摩郡役所などの公共施設としての矢島家、当時の自由民権運動の舞台ともなった高安寺、府中駅有数の商家であった島田家などといった財力のある家のシンボルであったともいえるのではないのでしょうか。大正2年府中に電灯がとれるまで、ガス灯は甲州街道を照らしたに違いありません。

*参考文献

- 郵政省通信博物館編・発行『資料目録』昭和49～
- 山口修編『郵便博物館』ぎょうせい 1987年4月
- 府中市史編さん委員会編『府中市史下巻』府中市 昭和49年3月
- 府中市広報課編『むかしの府中』府中市 昭和55年4月
- 神奈川県立図書館編・発行『神奈川県史料5』昭和44年2月

自然調査の意義

今回のシリーズでは、野外で行う自然調査の方法について、植物、昆虫、野鳥に関するそれぞれをいくつか紹介する予定です。一口に自然調査と言っても、目的によって色々な方法があるので、漠然と言われても一体何を調査するのだろうと思われるかも知れません。自然科学にフィールド調査は必要不可欠なものです。ですからまず初めに、自然調査の重要性について説明しておこうと思います。

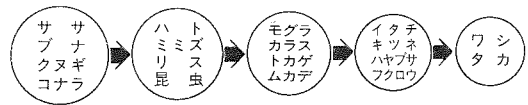
＝自然調査とは＝

博物館で見ることの出来る植物や昆虫などの標本は、どういう意図で展示されているのが御存知ですか？単にその地域に生息する生物をやみくもに並べているわけではありません。まず、その自然を構成している構成員のひとつひとつを理解していただく配慮がされています。また、付随するパネルやジオラマなどには、それらの生物の生活様式、生息環境の違い等、いくつかの要素が加味されています。自然を何となく眺めていても、自然を理解したり把むことは出来ません。即ち、その自然を正確に把むために自然調査とは、その自然を見出すための手段であり、ある環境単位について構成員である生物の種類と、その生物群集のタイプや規模、相互関係などのデータを収集するための必須要件なのです。

＝生態系の構造と機能＝

生態系という言葉が御存知でしょうか。我々人類は、地球と言う惑星の上に生活している生物です。我々の周囲には空気があり、水があり、日光があり、大地がある、つまり地球の環境が人類に適しているからこそ我々はここに存在するわけです。自然界と言うものは、生物と周囲の環境とが密接な関係を保ち、ひとつのまとまりを作っているものなのです。このまとまりを

生態系と呼びます。全ての地球上の生物は、森の動物、草原の虫、河川の魚と言った具合に、何らかの環境基盤の上に生息しています。更には、同一環境基盤に生息する様々な生物が互いにその生物にとっての環境となり、生物同志が関連し合って複雑な相関作用を形成していくのです。



上図は、森林と言う生態系の中で見られる互いの働き合いの一例です。これは、土壌と言う環境基盤の上にまず植物が根つき、林が出来上がる過程でその群落の中に草食動物が棲みつきます。草食動物が棲めばそれを餌とする小型の肉食動物の生息出来る環境となります。これに続いて更にその上の大型肉食動物が入ってくると一連の流れが出来上がり、その後もこの関係が安定して続く環境単位が生態系なのです。この場合、食物連鎖や栄養の流れを例として森林の生態系をとらえています。実際には更に気候条件、棲み家、休息の場としての地理地形的条件などの諸要素が加わり、なおさら網の目のような関係を生じさせています。自然を調査すると言うことは、この生態系の構造と機能を調査することなのです。

＝自然調査の内容＝

地球と言う大きな生態系は、部分的にたくさんのお小さな単位の生態系で成り立っています。自然調査は、その小さな単位の生態系を対象とします。そして、生態系を構成する生物の種類と、その群集間でのお互いの働き合いを数量関係で表すことの2点を中心に調査を進めていくのです。このことを踏まえた上で、次回から具体的な方法をお伝えしていきます。(N)

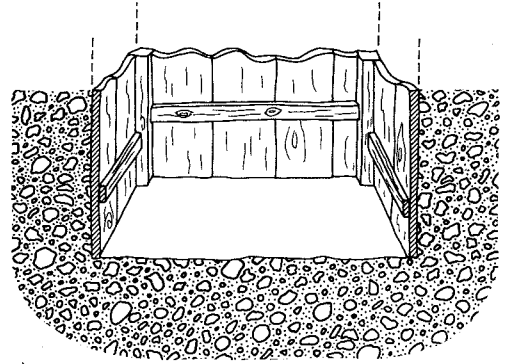
＝ 最近の発掘調査から ＝

府中市では、遺跡の調査により今までに50基ほどの井戸がみつかっています。これらの井戸は、水道のなかった昔の、水を得るための貴重な施設でした。

今回は、このうちの中世の井戸を紹介しましょう。宮西町の府中街道の西側でみつかったこの井戸は、府中市では数少ない中世のもです。しかも、井戸枠の構造が「縦板隅柱横棧式」と呼ばれるものと分かりました。このように、府中市内で構造のはっきり分かるものは、今までにありませんでした。これは、地面を正方形に掘り下げ、四方に土止めのために縦板を3～5枚あて、内側に四本の柱と横棧で枠を造り縦板を押える構造になっています。この枠の一边の幅は約120cm、底までの深さは現在の地面から約6.5mあります。

ここから出土したものに、常滑の甕の破片、古銭(元祐通宝?)、木製品などがみられます。また、出土したものの量が少ないことから井戸を廃棄する間に掃除したものと考えられます。

この井戸と同様の例は、全国的にみられますが、京都にある平安京跡では一般的な井戸の多



井戸枠復元図

くはこの形式です。また、神奈川県の鎌倉市内では鎌倉時代の後半より室町時代にかけてみられた形式とされています。これらのことから、この井戸は鎌倉時代から室町時代にかけての間に使われていたと考えられます。

さて、この地区の調査では、中世と考えられるものとして、この井戸と地下式横穴墓1基がみつかっています。そのほかに、中世と考えられる遺構はみあたりません。これは、この後の江戸時代にこの付近一帯の地面を削ったため、井戸や地下式横穴墓のような深いものだけが残ったためです。このように、少しずつですが府中市における不明だった中世の時代が分

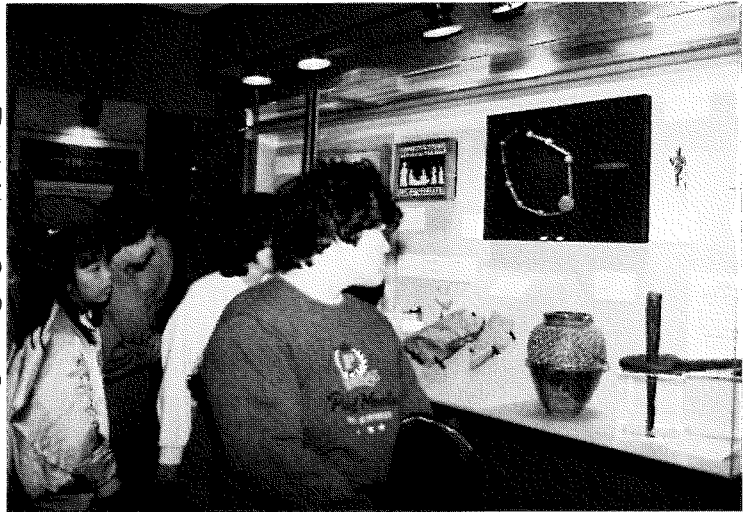


井戸の底(真鍋医院地区)

かりはじめています。
(宮西町・真鍋医院地区の調査から塚原)

府中市制35周年、郷土の森博物館開設3周年を記念して開催した海のシルクロード「古代シリア文明展」。世界初公開の資料を含む280点余の文物は、シルクロードの果て、シリアの遠い昔へと私たちの心を誘ってくれました。

(11/12~12/17)



こめっこクラブの子供たちが育てた田んぼの稲もりつばに実り、10月14日には稲刈りをしました。0.5反(5アール)の田んぼから今年はウルチ5斗(75kg)、モチ3斗(45kg)を収穫、12月24日にはこのモチ米を使ってもちつきをしました。

10月22日、11月19日に行った自然観察会では、多摩川の河原一面をうめつくすオギの群落や緑道のあざやかな紅葉の彩りをめぐり、暮れゆく秋の情景を堪能しました。

毎月第2土曜日恒例の森のお話会。秋から冬にかけてはチロチロ燃えるいろり端で聞くのにふさわしい民話や昔話がたくさんあります。



あれこれ

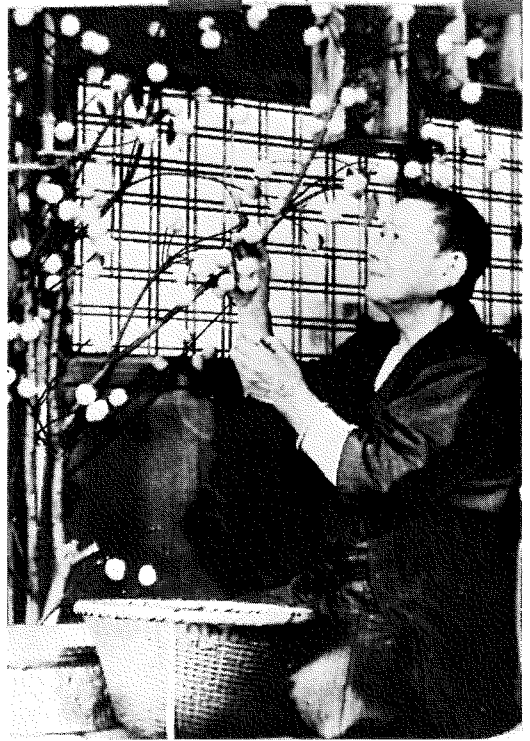
小正月のマユダマ

昭和29年の正月14日、マユダマの前の写真の主人公は、険しい表情ながら、何やら笑みを浮かべているようです。新年のはりつめた空気の中で、正月を祝い今年の無事と豊作を祈っているのでしょう。

正月1日の大正月に対し、14、15日を小正月こひがつといい、さまざまな予祝行事（あらかじめ豊作をまねて豊作を祈ること）がかつて行われていました。マユダマ（マユダンゴ）を飾るのもその一つで、マユに見立てた団子の花を咲かせて、カイコの安全を祈りました。養蚕に結びついた行事でした。

府中でも、明治の後半頃から養蚕をする農家が急速に増え、小正月には神棚の前に飾られたマユダマが、どこの家でも見られました。ナラカカシの枝を折ってきて、石臼の穴にそれを差し、米の粉で作った団子を枝に差します。14日の日に作り、16日にはずしたそうです。

かつてあれほどさかんだった養蚕も、戦後は化学繊維に押され、輸出も減り、段々と衰えていきました。昭和29年といえば、4月に府中市



制が施行されています。これを境に都市化の波が押し寄せ、同時にカイコの餌に用いた桑畑の風景も消えていきました。マユダマも次第に見られなくなりました。(〇)

インフォ メーション

府中市の花、「梅」の季節がやってきます。春の訪れを告げる紅白の花の彩りをお楽しみください。

郷土の森の「梅まつり」も今年で3回目をむかえます。博物館特別展示室では、梅果実の効能



をテーマに“健康食品としての梅”を、その生産量や、成分分析のデータを中心に公開します。もちろん園内でも、恒例の野点茶会や、琴、尺八演奏会を催し、観梅をより情緒豊かにおとどけます。春の足音が間近に聞こえてくる季節、郷土の森に咲きほこる満開の梅を心ゆくまで堪能してください。お待ちしております。

あるむせお 第10号
al museo イタリア語
“博物館で”“博物館にて”の意
発行年月日 平成2年2月1日
発行 府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921